

Basic Way of Thinking of the Learning Instruction to Apply what I Learned in Development of the "Acquisition, Utilization, Research" Cycle

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樺山, 敏郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6354

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



習得した知識や技能を活用する学習指導の 基本的な考え方

―「習得・活用・探究」サイクルの開発―

樺山敏郎

大妻女子大学家政学部児童学科

Basic Way of Thinking of the Learning Instruction to Apply what I Learned in Development of the “Acquisition, Utilization, Research” Cycle

Toshiro Kabayama

Key Words: 学力, 学校教育法, 全国学力・学習状況調査, 習得, 活用, 探究, サイクル

1 要旨

国内外の各種調査結果から、習得した知識や技能を活用する学習指導の重視性が叫ばれている。そこで、習得と活用の概念を整理し、学習指導において重視すべき基本的な考え方を提起する。要は、習得と活用をバランス良く加速させることである。そのためには、学習指導の過程に探究の概念を必然的に埋め込むことである。学習指導における持続的な探究の促進により、習得や活用が有機的に往還し、そのことにより活用する力が高まり、また知識や技能の習得は強固になるものと考えている。これらを「習得・活用・探究」サイクルの開発と換言する。

2 問題の所在

全国学力・学習状況調査（以下、全国調査と言う。）は、平成 19 年度から平成 27 年度までに計 8 回（平成 23 年度は中止）実施された。小学校第 6 学年及び中学校第 3 学年の児童生徒を対象に、国語と算数・数学（数年おきに理科）について、A 問題（主として「知識」に関する問題）と B 問題（主として「活用」に関する問題）を出題している。A 問題は、身に付けておかなければ後の学年の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識や技能などを出題している。B 問題は、知識や技能等を実生活の場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などにかかわる内容を出題している。

これまでの結果分析から明らかになっている課題の中心は、B 問題の正答率が十分ではないことである（注 1）。習得した知識や技能を活用する力に課題がある。A 問題と B 問題の相関関係に注目すると、小学校、中学校共に、そして国語、算数・数学両教科において、同じような傾向が見られる。それは、B 問題の正答率が高い児童生徒は、A 問題の正答率も高いのに対し、A 問題の正答率が高い児童生徒は、B 問題で正答率は広く分布していることである。活用する力が高い状況にある児童生徒は、知識や技能も習得され、それが発揮されている。一方、知識や技能が習得されていても、それが活用できる状況までは至っていない児童生徒が多いことを示している。このことは、知識や技能の習得を単に足し算にしていけることが、活用する力にそのまま順調に転移するとは言い切れないことを示唆している。

3 研究の意図

活用には、当然知識や技能の習得が不可欠である。それが前提であると捉えることが一般的であろう。そして、習得した知識・技能は活用されなければ、その必要性が実感されにくいものであろう。習得した知識・技能が生きて働くようにするためには、様々な場面や状況に応じて意図的にそれらを活用させて、定着と安定を図ることが大切である。B 問題は、実生活における様々な文脈を読み解く力や、解答者個々の思考や判断を説明する力などが求められている。こうしたことを踏まえ、活用するための基本的な考え方を整理するとともに、今後の学

習指導の改善を図っていくための方途を提起しようとするものである。

4 習得した知識や技能を活用する学習指導の基本的な考え方

(1) 法規定との関連性

平成 18 年 12 月に約 60 年ぶりに改正された教育基本法において、新たに教育の目標等が規定された。また、平成 19 年 6 月に公布された学校教育法の一部改正により、義務教育の目標が新しく示された(第 30 条第 2 項、第 49 条、第 62 条)。その中に、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と述べている。

これは、その定義が常に議論されてきた学力の重要な要素として、① 基礎的・基本的な知識・技能の習得、② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③ 学習意欲の三つを明確に示すものである。改訂では、今後において子供たちに身に付けさせるべき学力は何かということを法律の形にしたものといえる。このようにして、「習得・活用・探究」という三つのキーワードが学力の重要な三要素として浮かび上がることになる。

これまで学力とは何かという論争の中で、各人が違う定義により議論がかみ合わない部分があったことは否めない。いわゆる「読み書き算の徹底」(習得)を重視する側、「子供の主体性の尊重」(探究)を強調する側の二項対立的な不毛な議論に陥りがちだった。これらは、生きる力としての学力を育成する両輪となるものである。しかし、その両輪をつなぐべき軸が不安定であることなどから、学力向上が加速しない。そこで登場したのが、「活用」という概念である。「習得」と「探究」を一元化するために、両輪の間に「活用」という新しい軸を埋め込むという発想である(図 1)。

「習得・活用・探究」の三つの概念は、截然と分類できず、密接な関係にある。習得していなければ、活用する力は伸びない。いわずや探究することは程遠い。一方、探究というベクトルを通して、習得したことに価値や意味を見いだしたり、活用する力や意欲が向上したりすることもある。

<生きる力としての学力>理念の実現

△対立<二元論>

【読み書き算の徹底】×【子供の主体性の尊重】
(基礎的・基本的な知識・技能) ↓ (自ら学び自ら考える力の育成) ↓

習得・・・・・・・・・・探究

◎融合<一元化>

活用

◆知識基盤社会として必要な基礎的・基本的な知識・技能を習得するとともに、それらを活用し探究する

図 1:「習得・活用・探究の関係」イメージ

習得と活用、そして探究の総合化、一体化を図る指導が重要である。子供たちの探究を促進する中で、知識や技能を一つ一つ習得させ、積み上げて活用させるとともに、活用を図る中で知識や技能の必要性を自覚的に捉えさせ、生きて働くものとして安定させる学習指導の充実を図ることが望まれる。

「習得・活用・探究」と「生きる力」との関連を考えてみる。今回の学習指導要領の改訂では、「生きる力」という基本理念が継続されることになった。「生きる力」とは、基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人と共に協調し他人を思いやる心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力のことである。

生きる力をはぐくむことを学力の側面から捉えようとするとき、今後到来するであろう社会構造の変化を踏まえることが必要である。平成 20 年 1 月に出された中教審答申(注 2)では、「21 世紀は、新しい知識・情報・技術が、政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる『知識基盤社会』(knowledge-based society)の時代である」と述べている。また、「知識基盤社会」については、① 知識に国境はなく、グローバル化が一層進む、② 知識は日進月歩であり、競争や技術革新が絶え間なく生まれる、③ 知識の進展は、旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる、④ 性別や年齢を問わず参画することが促進される」などをその特質として挙げている。また、「このような知識基盤社会化やグローバル化は、アイディアなどの知識その

ものや人材をめぐる国際競争を加速させるとともに、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている」とも述べている。

このような社会において、自己責任を果たし、他者と切磋琢磨しつつ一定の役割を果たすためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得は欠かせない。また、知識・技能は陳腐化しないように常に更新する必要がある。更新するためには、自己の課題解決という探究活動の中で、現在習得している知識・技能が十分か否かといった現状を活用させて自覚化を図ることが重要である。

(2) キーコンピテンシーとの関連性

前述したような認識は、国際的にも共有され、経済協力開発機構 (OECD) は、「知識基盤社会」の時代を担う子供たちに必要な能力を、「主要能力 (キーコンピテンシー)」として定義付けている (注 3)。「主要能力 (キーコンピテンシー)」とは、「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な課題に対応することができる力」であり、具体的には、①社会的・文化的・技術的ツールを相互作用的に活用する力、②多様な社会グループにおける人間関係形成能力、③自立的に行動する能力という三つのカテゴリーで構成されている。

このような認識の下、各国においては、学校の教育課程の国際的な通用性がこれまで以上に強く意識されるようになってきているが、我が国が捉える「生きる力」の概念は、まさしくこの「主要能力 (キーコンピテンシー)」という考え方を先取りしたものと言ってよい。

つまり、基礎的・基本的な知識や技能の習得は、様々な文脈の中で活用され得ることを射程においたものであり、自律的な問題解決や探究の過程の中で、他者と協働しながら必要で有益な力として有効に発揮されるべきものという認識に立つ必要がある。

(3) 「習得・活用・探究」の関係性

「習得・活用・探究」について、小学校学習指導要領解説の総則編 (注 4) に、「確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること」、「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他をはぐくむことの双方が重要であり、これらのバランスを重視する必要があること」、「習得・活用・探究は学習活動であって、身に付けるべきは『基礎的・基本的な知識・技能』及び『思考力・判断力・表現

力等』であること」、「『習得→活用→探究』は決して一つの方角に進むだけではないこと」などと述べられている。また、先行研究を概観すると、成田 (2008 年) は、「学習することの価値ややり甲斐を感じることができるような仕組みを整え、学習の目的と相手という活用機会を伴う活動にする」と、活用の場の重要性を述べている。また、田中 (2008 年) は、「『習得・活用・探究』はセットで考えないと育たない。既に各方面で専門家が口々に述べている」としている。

これまで述べてきたことから、「習得・活用・探究」の関係性を次のように整理することができる。

○「習得・活用・探究」の三つは截然と分類できず、密接な関係にある。探究というベクトルを通して、習得したことに価値や意味を見いだしたり、活用する力や意欲が向上したりするものである。

○習得と活用、そして探究の総合化、一体化を図る指導が重要である。子供たちの探究を促進する中で知識や技能を一つ一つ習得させ、積み上げて活用させるとともに、活用を図る中で知識や技能の必要性を自覚的に捉えさせ、生きて働くものとして安定させる学習指導の充実を図ることが望まれる。

○知識や技能は陳腐化しないように常に更新する必要がある。更新するためには、課題解決という探究活動の中で、現在習得している知識や技能が十分か否かを活用させることで現状の自覚化を図ることが重要である。

○基礎的・基本的な知識や技能の習得は、様々な文脈の中で活用され得ることを射程に入れるとともに、自律的な問題解決や探究の過程の中で、他者と協働しながら必要で有益な力として有効に発揮されるものという認識に立つ必要がある。

○活用できることが望ましい知識や技能の習得が不十分であることに加え、習得と活用の間に断層が生じている。今後、この断層を埋める指導の工夫が必要となる。

○知識や技能の習得を単に足し算にしていくなことが、活用する力にそのまま順調に転移するとは言いきれない。活用するには、当然知識や技能の習得は不可欠である。習得した知識や技能が活用されなければ、それは陳腐化し剥落する。生きて働く知識や技能になるように、様々な場

面や状況に応じて活用させて、その定着と安定を図ることが大切である。

要は、習得と活用、そして探究のバランスである。バランスは、ある意味感覚的な部分がある。それを集中的に吟味していくためには、教師のこれまでの指導観や授業観を再度検討する必要がある。習得優先に傾斜しすぎて、教師主導の知識注入中心の授業に陥ってはいないだろうか。田中(2008年)は、「どうしても、まず習得させてそれから『さあ、使おう。もっと役立てよう……』という流れになる。だが、よく考えたらこの教育の流れは戦後ずっと繰り返してきたことである。そして、活用できない子がたくさん育ったのだ」と述べている。習得の流れをパターン化し、マンネリ化や固定化につながってはいないだろうか。子どもたちへの内発的な動機付けが乏しく、学習の目的や課題意識が弱いと学習意欲は持続せず達成感や満足感は薄れる。大熊(2008年)は、「学習指導は、あくまでも子どもの課題意識や興味・関心を起点として展開されるべきものである。しかし、実情は、何が課題か分からない子どもも、課題を見付けられない子どもも多い」と指摘した上で、導入の前に子供たちの課題意識や興味・関心を十分に醸成する時間をとるように提案している。

一方、一見すると自由で楽しい授業の雰囲気は満足しすぎて、「活動あって能力なし」の状況に教師自身が気付いていない現状はないだろうか。身に付けさせるべき指導目標や指導内容が明確であろうか。課題をもって主体的に探究する中で、他者と協調し物事の真理を感じたり、正誤などを深く理解したり、目標を達成したり課題を解決したりする喜びや成就感、自信をもてることなどが真の楽しさであろう。

最近の研究実践の中に、習得型や活用型、探究型といった授業スタイルの分類を見聞きする。特に、活用型に特化した取組が紹介され注目を集めている。一過性の流行にならないようにしたい。それぞれの型で育成する能力を明確にするとともに、型相互を関係付けた指導計画の吟味や具体的な評価の在り方などの究明が今後の課題である。先にいくつか型を作り、それに授業を当てはめるという発想よりは、年間における単元、単元における単位時間の位置やねらい、また単位時間内における指導内容の進捗や子供の状況等を踏まえながら、「習得・活用・探究」のいずれかに傾斜をかけるという発想が望ま

しい。傾斜なので、「習得・活用・探究」のいずれもが授業の中に存在するという考え方である。

前述のとおり、「習得・活用・探究」は截然と分類し難い。不可分な関係を機械的に分類したり分断したりすることは、授業を硬直化させることもある。子供たちの側に立つと、教師に与えられる型の分類に適合させた思考や行動を強いるだけでは、他律的な学習に陥ってしまう。本来、学習という枠組みにおける思考や行動は制御されて然るべきであるが、自由な思考を制御しすぎでは豊かな想像力や創造力は高まらない。子供たちの自主的・自律的な学習を推進する上でも、「習得・活用・探究」の学習活動が常に往還して思考を深めたり、進捗の状況に応じて活動の軌道修正をしたりできるような時間や空間を保証したい。

5 「習得・活用・探究」サイクル(循環)の開発

「習得・活用・探究」は、サイクル(循環)を基本として捉えることが重要である。サイクル(循環)とは、一巡りしてもとへ戻ることを繰り返すことである。ある行為や活動を螺旋的・反復的に繰り返すことにより、能力は系統的・段階的に高まる。「習得・活用・探究」の学習活動は、それぞれの活動が関与しながら、幾重にもなってスパイラル(らせん状)に向上するサイクル(循環)の過程を重視したい。一般的には、無知の状態を起点としたとき、知識や技能の習得を出発し、それらを活用させながら習得の定着や安定が図られる。習得と活用とを有機的に関係付けることで、基礎的・基本的な知識・技能は更新され、その量の増大や質の向上を図ることができる。併せて、思考力・判断力・表現力も向上する。では、探究の位置付けはどうなるだろうか。習得と活用とを循環させながら、それを先へ上へと進めるエンジンと捉えたい。自主的・自律的な学習を促進する上で、エンジンとなる探究は欠かせない。学習の主体者に内蔵されているエンジンがかかるとき、習得と活用は加速する(図2)。

探究というエンジンの性能によって習得と活用の加速が違ってくる。性能を向上させるために教師の役割は大きい。教師による外発的あるいは内発的な動機付けの工夫が必要である。効果的な動機付けは、問題解決への主体的な学習意欲を高め、他者と協働して学ぶ姿勢をはぐくむ。サイクル(循環)を回す上で、重要かつ不可欠な探究という観点について

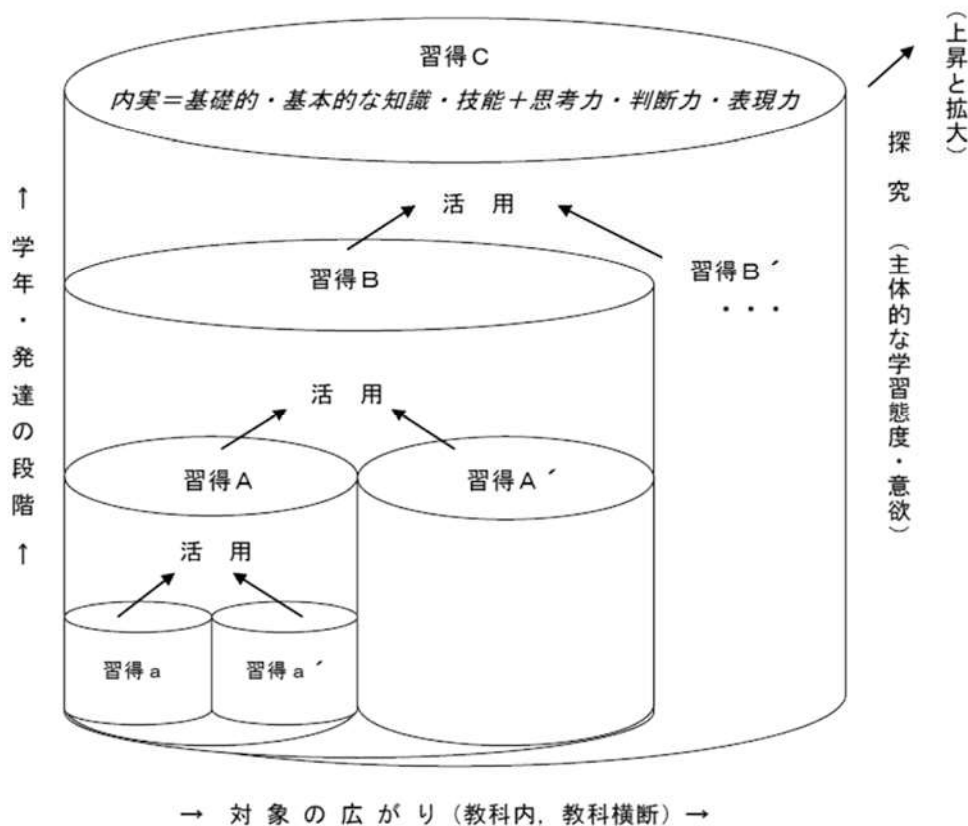


図2: 「習得・活用・探究」サイクル（循環）のイメージ

では、これまで以上に具体的な手だてを講じることが大切である。ここでは、「学年や発達の段階」、「教科の特質や特性」、「単元や単位時間の位置や目標」の三つの観点からアプローチすることにする。

(1) 学年・発達の段階

一般的に、習得の量の充実が活用の質の充実につながると考えられる。そのために小学校低学年から中学校までの学年及び発達段階に応じて、習得及び活用に傾斜をかける割合を調整する必要がある。

小学校低・中学年においては、いわゆる「読み・書き・計算」などの基礎的・基本的な知識・技能の面については全教科にわたる不可欠な基盤となることなどから、その習得に傾斜をかける。そして、学年や発達が進むにつれて、段階的に活用の幅や割合が広がるよう指導を構想することが重要である。また、基礎的・基本的な知識や技能については、繰り返し活用して剥落しないように、その状況の確認と更新を自覚的に行うことも大切である。

(2) 教科の特質や特性

例えば、国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、能力の定着を図ることを基本としている。つまり、習得と活用とが分かち難く、双方向に影響し合うという教科の特質がある。

一方、算数・数学科や社会科など知識内容が明確に系統化された教科等においては、その都度、知識内容を徹底して習得させた上で、活用できるよう段階的な指導が重要である。しかし、そのような知識内容の習得も基本的には螺旋的・反復的な繰り返しのによって、系統的・段階的に定着し安定することに間違いはない。以前、習得した公式を活用することで、更にその意味や役割の理解が定着したり、新しい概念の理解につながったりするものである。習得と活用との循環を考える際には、教科の特質や特性についても配慮する必要がある。

(3) 単元や単位時間の位置や目標

単元を構想する場合、ユニットとしての位置付けと配当時間数などを踏まえて指導目標を決定する必要がある。その際、年間指導計画に基づき系統化した単元の中で身に付けさせる能力の習得を重視するのか、既知の習得を生かした活用を重視するのかを検討する。その上で単元の総時間数を考慮して、「習得→活用」あるいは「活用→習得」の流れや傾斜配分、配当時間を弾力的に構想することが大切である。これらの考え方は、単位時間においても同様である。

「習得・活用・探究」をサイクル（循環）として機能化させるためには、能力の側面として、思考力・判断力・表現力の育成が要であると考え。表現を変え、思考力・判断力・表現力の育成を主眼におくことで、「習得・活用・探究」の学習活動が効率的にサイクル（循環）として機能し、学力の向上を図ることにつながるというほうが適切である。これまで述べてきたとおり、全国調査をはじめ各種の調査結果において、いずれも知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等に課題があることが分かっている。物事や対象を正しく深く認識するという理解力と、認識したことを可視化、客観化するという表現力が一体的に発揮されていない現状がある。理解から表現のプロセスにおいて、思考力や判断力などの考える力の育成や強化が不十分とも言える。

「習得・活用・探究」サイクル（循環）を重視する学習活動は、理解から表現のプロセスを幾重にもたどりながら、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図り、思考力・判断力・表現力を高めていくものである。

中央教育審議会答申（注2）では、各教科等において、次のような活動を行うことで思考力・判断力・表現力等を育成できると述べている。

① 体験から感じ取ったことを表現する

（例）日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する

② 事実を正確に理解し伝達する

（例）身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述・報告する

③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする

（例）需要、供給などの概念で価格の変動を捉え

て生産活動や消費活動に生かす

（例）衣食住や健康・安全に関する知識を活用して自分の生活を管理する

④ 情報を分析・評価し、論述する

（例）学習や生活上の課題について、事柄を比較する・分類する・関連付けるなど考えるための技法を活用し、課題を整理する

（例）文章や資料を読んだ上で、自分の知識や経験に照らし合わせて、自分なりの考えをまとめて、A4・一枚（一〇〇〇字程度）といった所与の条件の中で表現する

（例）自然現象や社会的事象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読み取ったり、これらを用いて分かりやすく表現したりする

（例）自国や他国の歴史・文化・社会などについて調べ、分析したことを論述する

⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する

（例）理科の調査研究において、仮説を立てて、観察・実験を行い、その結果を整理し、考察し、まとめ、表現したり改善したりする

（例）芸術表現やものづくり等において、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価し、工夫・改善する

⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

（例）予想や仮説の検証方法を考察する場面で、予想や仮説と検証方法を議論しながら考えを深め合う

（例）将来の予測に関する問題などにおいて、問答やディベートの形式を用いて議論を深め、より高次な解決策に至る

これら①から⑥は、二つに大別できる。

一つは、「言語活動の充実」である。主に①から④までが該当する。伝達、記述、報告、説明、論述などの言語活動を各教科等で充実するように求めている。もう一つは、「学び方の工夫・改善」である。主に⑤と⑥が該当する。互いの考えが発展するために課題を解決する場やプロセスを工夫するよう求めている。

「言語活動の充実」及び「学び方の工夫・改善」の二つの観点を念頭に置く必要がある。特に、「言語活動の充実」については、各教科等を貫く重要な改善の観点である。国語科を中核として言語の能力を高めるとともに、各教科等においてもその能力が

発揮されるよう指導の充実を図ることが求められている。

これらのことを踏まえ、筆者が提案する「習得・活用・探究」サイクル（循環）の中に、要となる思考力・判断力・表現力をどのように関連付けるかを考えてみる。

思考し判断し表現する一連のプロセスは、次の四つのプロセスと重なる。

- ア 思考し判断して表現する一連のプロセスは、認知・認識のプロセスでもある。
- イ 思考し判断して表現する一連のプロセスは、問題解決のプロセスでもある。
- ウ 思考し判断して表現する一連のプロセスは、情報活用のプロセスでもある。
- エ 思考し判断して表現する一連のプロセスは、言語活動のプロセスでもある。

ア 思考し判断して表現する一連のプロセスは、認知・認識のプロセスでもある。

人間の諸感覚を通して入力した事物や事象について分析、総合、比較、抽象、概括などの思考過程を通し、認知や認識を行動や表現により出力する。これは、思考し判断して表現するプロセスと重なる。出口には個々に新しい意味的な世界が広がる。テキストを生み出すのである。テキストとは、原本とは異なる別の表現物のことである。テキストを生成する過程において思考力・判断力・表現力は不可欠であり、学習指導においては学習者が自らのテキストを新たに生み出すことを重視したい。

イ 思考し判断して表現する一連のプロセスは、問題解決のプロセスでもある。

問題解決的な学習では、児童生徒が問いをもち、その解決に向けて自律的かつ協働的に取り組むことが重要である。問題解決のプロセスにおいて、思考は常に連続し発展する。その思考の往還の中で、解決のために必要な事柄や適切な方法及び手順の選択、判断が繰り返される。そして、問題解決の出口として何らかの表現行為がある。「習得・活用・探究」サイクル（循環）の要となる思考力・判断力・表現力を高めるには、このような問題解決のプロセスを児童生徒自身により多く経験させるとともに、それらを主体的なものにしていきたい。

思考や判断、表現は、本来個別的なものである。一人一人のそれらを問題解決のプロセスの中で埋没させてはならない。そのためには、自己の形成を主

眼に置きながら、他者との交流を通し、それらを価値付けたり修正したりする学習指導が大切となる。思考したことは論理的か、判断したことには理由や根拠はあるか、それは科学的か客観的か、表現した内容や形式は的確か、説得力があるかなどについて相互に吟味し検討することで問題解決の能力や質が高まる。

このようなことに関連して、小学校及び中学校学習指導要領の総則第四「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」では、「各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童生徒の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること」と述べている。

問題解決的な学習や体験的な学習には、児童生徒一人一人が主人公になるような冒険的な考え方やプロセスを重視する。冒険の始まりにおいては、意欲の喚起を図り、目的や目標（学習目標・ゴールイメージ）を明確にする。その上で過去の経験や既存の知識を生かして必要な準備をするとともに、見通しや計画を立てる。冒険の途中には、様々な出会い（先生、友達などの第三者）や困難（問いの連続、葛藤、他者との対立）があり、発見（新たな認識、知識や技能の習得）がある。冒険が終わるときには、それまでのプロセスを通して体得したことや考えたこと（自己の変容、第三者からの刺激、困難に打ち勝つ工夫）などを表出し交流することで、自他の成長や自信、共同体の結び付きを実感できる。

このような冒険的な考え方やプロセスを問題解決的、体験的な学習における各段階の指導と関係付けることで思考力・判断力・表現力の向上を図ることができる。

ウ 思考し判断して表現する一連のプロセスは、情報活用のプロセスでもある。

高度情報化社会の到来により、目的や課題によって主体的に情報を収集し、その内容を正確かつ多面的に理解したり、情報を効果的に活用したり表現に生かしたりすることが求められている。視覚や聴覚などの諸感覚を通して収集する様々な事柄や内容は、実生活において必要かつ重要な情報であるとともに、各教科等の学習においては素材であり教材である。

例えば、国語科学習においては、目的や課題に即して本や文章などの文字表現及びスピーチやインタビューなどの音声表現されたものを情報として収集

し、内容や意図などを解釈する。そして、それらに対する自分の考えを形成しながら、記録、紹介、説明、報告などの様式を踏まえた上で、情報の一部を引用したり、要約したりするなどして表現する。これらは、思考し判断し表現する情報活用の一連のプロセスをたどっている。また、各教科等で行う観察や実験、見学や調査などの調べ学習なども同様である。その際、本や文章、新聞やインターネット等のメディアの情報を知識として獲得したり活用したりするとともに、情報メディアそのものを効果的に活用することができるように指導することも重要な視点である。

「習得・活用・探究」サイクル（循環）の要となる思考力・判断力・表現力を高めることは、情報の受信者としての正確な理解力、情報の送信者としての的確な表現力を高めることである。次に、情報活用の一連のプロセスを示す。

＜①目的や課題の設定＞

- ・目的や課題を設定したり、確認したりする。

＜②情報の収集・選択＞

- ・目的や課題に応じて、情報を収集しその中から必要な情報を選択する。

＜③情報の取り出し＞

- ・選択した情報の内容一つ一つを取り出し、確認する。

＜④情報の分類・整理＞

- ・情報に関連する要素や観点別に分類したり、整理したりする。

＜⑤情報の理解や解釈＞

- ・情報に込められた送り手の意図、受け手への効果を捉える。

＜⑥情報に対する評価＞

- ・内容や形式などについて評価する。

＜⑦情報の操作・活用＞

- ・表現する目的や意図、様式に応じて、情報を引用したり、加工したりする。

＜⑧情報の発信・交流＞

- ・目的や課題を達成するために、情報を発信したり、交流したりする

エ 思考し判断して表現する一連のプロセスは、言語活動のプロセスでもある。

思考し判断して表現する基盤となるのは、数式などを含む広い意味での言語である。「話す」「聞く」「書く」「読む」行為における文字言語や音声言語の操作や運用を通じた発表、討論、記録、要約、説明、論述などの言語活動の充実が求められている。

言語は論理的思考だけでなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある。豊かな心をはぐくむ上で、言語に関する能力を高めていくことは重要である。今回の改訂においては、言語に関する能力を重視し、各教科等において言語活動を充実することとしている。具体的には、言語に関する能力を育成する中核的な教科である国語科においては、「話す」「聞く」「書く」「読む」のそれぞれに記録、要約、説明、論述といった言語活動が例示されている。また、各教科（小学校）においても、次のような記述がある。

◇（社会）「観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実」

◇（算数）「三角形、平行四辺形、ひし形及び台形の面積の求め方を、具体物を用いたり、言葉、数、式、図を用いたりして考え、説明する」といった算数的活動の充実

◇（理科）「観察、実験の結果を整理し考察する学習活動や、科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりするなどの学習活動」の充実

◇（生活）「自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかわるくわりの楽しさが分かり、進んで交流する」活動の充実

◇（音楽）「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること」の重視

◇（図画工作）「感じたことや思ったことを話したり、友人と話し合ったりするなどして、表し方の変化、表現の意図や特徴などを捉えること」の重視

◇（家庭）「衣食住など生活の中の様々な言葉を実感を伴って理解する学習活動や、自分の生活における課題を解決するために言葉や図表などを用いて生活をよりよくする方法を考えたり、説明したりするなどの学習活動」の充実

◇（体育）「自分のチームの特徴に応じた作戦を立てたりする」活動の重視

このような言語活動は、目的や課題に即して、文字言語や音声言語を通して思考し判断し、記録や説明などの様式に合わせて表現するという言語操作、言語運用のプロセスをたどることにほかならない。

「習得・活用・探究」サイクル（循環）において、思考力・判断力・表現力の育成が要となることを述べてきた。また、思考し判断して表現すること

を一連のプロセスとして捉えた上で、「認知・認識」「問題解決」「情報活用」「言語活動」の四つのプロセスを取り上げ、思考力・判断力・表現力との関連について論を展開してきた。これらを整理する。

- ・子供たちは、学年や発達の段階に即して、知識や技能を習得し、それらを活用して思考力・判断力・表現力を高めていく。
- ・習得する知識や技能に関する対象や内容は、教科内のみならず、教科等を横断して広がり、と深まりをみせる。
- ・習得した知識や技能は、既存のそれらを含めて複数組み合わせ活用するものである。
- ・複数の習得の結合とその活用を通して、知識や技能の習得を更新したり強固にしたりする。
- ・習得と活用は、様々な学習場面で常に往還しながら、螺旋的・反復的に連続し発展するものである。
- ・習得と活用を連続・発展させたり、上昇・拡大させたりする原動力が探究である。
- ・探究という活動や概念に含まれるものは、主体的な学習態度や学習意欲である。
- ・「習得・活用・探究」の学習活動のサイクル（循環）は、スパイラル（螺旋状）かつ立体的に上昇・拡大する。
- ・「習得・活用・探究」の学習活動のサイクル（循環）の要となるのが、思考力・判断力・表現力である。
- ・思考力・判断力・表現力を高めるためには、「認知・認識」「問題解決」「情報活用」「言語活動」の四つのプロセスを統合することが重要である。
- ・四つのプロセスの統合を図る指導を構想し実現することにより、「習得・活用・探究」の学習活動のサイクル（循環）を効率的に機能させるとともに、学力を向上させることが期待できる。

「習得・活用・探究」サイクル（循環）に「認知・認識」「問題解決」「情報活用」「言語活動」の四つのプロセスを分化させずに、各教科等の学習指導のプロセスの中に一体的に統合させ埋め込んでいくようにする。

プロセスとは、ある目的や目標を遂行していく過程である。プロセスは多様に存在してよい。一般的

には、多様なプロセスの中から目的や目標の実現や達成に適したものを決定すればよい。一方、学習指導においては、授業時数や時間という一定のスパン（時間の幅）を踏まえる必要があり、プロセスの選択にも制限が加わる。そこで、学習指導プロセスの一般化を図ることは意義深い。一般化したプロセスをそれぞれの教科の特質や児童生徒の実態等に応じてより良く改良していけばよいのである。プロセスの統合を図るときに入口と出口が重要となる。フレームを規定しなければプロセスは明確にできない。フレームとして、小学校や中学校などの学校種として考えると、入口は入学であり、出口は卒業であろう。また、一つの学年（一年間）を枠組みとすると、入口は進級であり、出口は修了であろう。各教科等を枠組みとしても同じように区切ることができる。生涯学習の観点に立つと、学習そのもの出口はなくフレームを規定することは難しい。

プロセスの枠組みを考える際、一定の教育や指導の目的のためにひとまとめた指導計画を中心として捉えたほうが現実である。指導計画は、年間及び単元、単位時間において作成するものであるが、ここでは単元レベルとして考えることにする。単元の入口と出口においては、年間の指導計画に基づいた指導目標の設定とその目標に準拠した適切な評価が重要となる。また、単元の入口から出口までのプロセスにおいては、常に指導と評価との一体化を図ることが重要である。

学習者の側に立つと、入口においては学ぼうとする動機付けが重要である。出口においては一連のプロセスを通じた学習の成果や課題を整理して評価できるようにすることが重要である。

単元を構想するためには、特に入口における学習者の自律性と他律性、そして、出口における成果の単一化と複数化の観点に配慮することが大切である

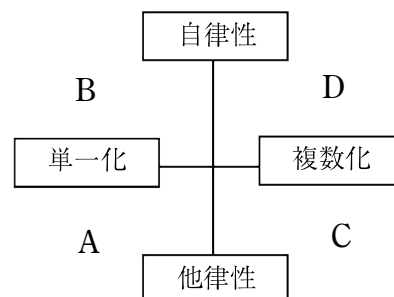


図3: 単元の指導において射程に入れるべき4つのブロック

(図 3)。

A → 他律性に配慮し、成果を単一化する

B → 自律性を重視し、成果を単一化する

C → 他律性に配慮し、成果を複数化する

D → 自律性を重視し、成果を複数化する

単元の入口においては、学習の動機付けを重視する上で他律を自律へと高めたいものである。単元の出口においては、成果を単一化せず複数化したいと考える。しかし、A のように、基礎的な知識や技能の習得を単一化する場合、他律性に配慮した反復などによる徹底した指導が求められる。単元の入口から出口までの一連のプロセスを見据えながら、A・B・C・D の 4 つのブロックのどのエリアを射程に入れて指導するのかを十分検討することが重要である。

6 おわりに

本稿では、学力の重要な要素が提示される中で、それらの要素をどのように関連付け、融合させるかという点を検討してきた。その中で、習得・活用・探究という概念がサイクルとして、螺旋的・反復的に定着し、向上していくことを提案した。ただ、これらが小学校及び中学校段階でどのような傾斜配分していけばよいか、各教科等の特質に応じて、あるいは各単元や題材に応じてどのような指導を展開していけばよいかといった、実践的な検証が課題であ

る。特に、学習指導における導入の段階や終末の段階における、習得・活用・探究をどのように具体化するかを検討していくような研究を進めていきたい。

〔参考文献〕

- (注 1) 全国学力・学習状況調査の 4 年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ、2012 年、教育出版
- (注 2) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）、2008 年、中央教育審議会
- (注 3) PISA 調査評価の枠組み、2010 年、経済協力開発機構
- (注 4) 小学校学習指導要領解説総則編、2008 年、文部科学省

〔引用文献〕

- ・成田雅樹、『小学校「国語の知識」を定着させる授業づくり－いま求められる国語力の基礎基本－』、2008 年、明治図書
- ・田中博史、『習得・活用・探究をもつなぐ追究型算数ドリルのすすめ』、2008 年、明治図書
- ・大熊徹、『小学校国語 B 問題を授業する－「活用」の力とはなにか－』、2008 年、明治図書